

## 「青少年教育指導者専門研修」

平成 24 年 1 月 31 日（火）～2 月 3 日（金）3 泊 4 日



### I 事業の背景（必要性）

国立青少年教育施設の役割の一つとして、青少年教育指導者を対象とした専門性の高い研修の企画実施を通して資質向上を図っていくことが挙げられる。

中央交流の家は、我が国最初の国立青少年教育施設であるといった歴史的な背景や、首都圏から比較的近くにある交通アクセスが良いことから「指導者研修の重点化」を事業方針とした。

そこで、今年度新たに青少年教育に携わり、かつ、ある程度の経験のある者を対象に、専門的な知識・技能を高める研修を実施することとした。

### II 事業の概要

#### 1. 趣 旨

青少年教育施設や教育行政及び地域等において、青少年の健全育成に携わる指導者に求められる、専門的な知識・技能を習得し、指導者としての資質・能力の向上を図る。

#### 2. 参加者

##### （1）対象・募集人数

青少年の健全育成に携わる者 30 名

（青少年教育施設・教育委員会・教育研修所・NPO 法人団体・民間自然学校・自立支援機関等・青少年厚生施設等で勤務及び活動する者）

##### （2）参加状況

<内訳>

	男性	女性	合計
青少年教育施設	15	4	19
その他	5	1	6
合計	20	5	25

<参加地域>

	男性	女性	合計
北海道	1	1	2
東北・関東	10	0	10
中部・近畿	5	2	7
中国・四国	1	1	2
九州・沖縄	2	1	3

##### （3）広報の方法

- ① 募集チラシを作成（交流の家作成）（資料 1）
- ② 全国青少年教育施設に配付（約 700 施設）
- ③ 全国都道府県青少年教育担当部局への配付（47 都道府県）
- ④ 全国政令指定都市青少年教育担当課への配付（19 都市）
- ⑤ 神奈川・山梨・静岡県近隣市町村青少年教育担当課への配付（30 市町村）
- ⑥ 青少年教育に関する NPO 法人、全国ボーイスカウト、ガールスカウト連盟等の

民間団体への配付 (110 団体)

⑦ 県内および首都圏での新聞掲載を依頼 (報道 5 社)

### 3. 日 程

31 日 (火)	13:20 13:30		15:00 15:15		16:45 18:30		20:30	
		開講式	「青少年教育における 不易と流行」	「我が国の 青少年教育施策」	情報交換会 (夕食含)			
1 日 (水)	9:00 10:00		12:00 13:30		15:30 16:00		20:00	
	「導入 一企画 とは」	「ケーススタディで高める 企画力・運営力」 事例 1 「長野県飯田市の市街地・ 山間部の交流事業」		事例 2 「NPO 法人ガイア自然学校 における体験活動事例」		「まとめ一企画 力・運営力の要点 一」 ※途中, 夕食		
2 日 (木)	9:00				17:00 18:00		19:30	
	「指導力を高めるーグループワークの理論と実践ー」 ※途中, 昼食・休憩					夕 食	研修のまとめ	
3 日 (金)	10:00		12:00 12:20					
	「体験活動の意義再考 ー哲学の視点で考えるー」		閉講式	(解散)				

### 4. 内 容 (活動の様子)

#### (1) 「青少年教育における不易と流行」(講義)

講師：日本ボランティア学習協会理事 伊藤 俊夫氏



- ① 不易と流行という言葉にはさまざまな解釈があるが、ここでは不易といっても鵜呑みせず、常時、哲学的、歴史的視座での基本理解に努めること。流行についても時の流れに呑み込まれずに、社会的視座で現状理解に取り組んでいくことが重要である。
- ② 共同宿泊による青年の社会性錬磨をねらって出発した青少年教育施設にも、現在では逆風が吹くといわれる。

例えば、大型利用団体への傾斜、自主性や挑戦、失敗・成功体験の希薄化などである。しかし、不易であるべき社会性が崩壊するのを止めるという時代の要請に青少年教育施設が責務を果たしていくために、職員が考え、行動を続けることが大切である。

#### (2) 「我が国の青少年教育施策」(講義)

講師：文部科学省スポーツ青少年局 青少年教育官 藤原 一成氏

インタビュアー：NPO 法人 体験型科学教育研究所 古川 和氏

- ① 日本国憲法・教育基本法・学校教育法における青少年教育関係事項や行政組織関係法令、また、平成 24 年度の「青少年の健全育成施策」について説明。
- ② 参加者参画型の講義の一部として、アイスブレイク的なアクティビティを行い、参加者の能動的な事業への参加を促した。

#### (3) <企画力・運営力を高める>

「ケーススタディで高める企画力・運営力」(事例研究・演習)

事例 1 「長野県飯田市の市街地・山間部の交流事業」

講師：飯田市教育委員会生涯学習・スポーツ課  
木沢地区活性化推進協議会

伊藤 弘氏  
松下 規代志氏

事例2「NPO 法人ガイア自然学校における体験活動事業」

講師：ガイア自然体験学校

成田 裕氏

ミーティングファシリテーター：(財)キープ協会

増田 直広氏

<事例1の概要>

- ① 地域で展開された体験活動事例として飯田市における小学生を対象にした市街地・山間部の交流事業を取り上げた。
- ② 過疎化が進み、将来的に人口減が避けられない状況から、町づくりの基本方針を『自立』と『持続可能』な地域づくりとし、この中に「帰ってきたいと考える人づくり」を位置づけている。
- ③ この「人づくり」の方策として、「学校における農業宿泊体験の推進」を計画した。
- ④ 市街地にある浜井場小学校5年生が、山間部である木沢地区等でのふるさと体験・農業体験を行った。
- ⑤ 教育委員会は、受入先との調整、体験プログラムの作成、活動の支援などを担った。



<事例2の概要>

- ① 能登で活動するNPO法人「ガイア自然学校」は、年間を通じて日帰りや泊を伴う自然体験プログラムを展開している。また、親子キャンプや自然体験を通じた子育てワークショップも実施している。
- ② 成田代表は、学生時代にキャンプと出会い、就職した会社が運営していたキャンプ場の運営を任された。その後、ご自身でNPO法人の自然学校を設立された。
- ③ ガイア自然学校の特色は、キャンプリーダーとなる学生を募り、様々な研修（トレーニング）を通じて、指導者に必要なスキルを習得させ、育成していること。
- ④ また、定期的に発行している「GAIA 通信」で、ボランティアスタッフやキャンプの様子を紹介して、保護者からの信頼を得ている。



(4) <指導力を高める>「グループワークの理論と実践」(講義・実習)

講師：桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部

青山 鉄兵氏

- ① 青少年の指導に有効なグループワークとは何か、グループワークの教育的意義、リーダーの役割等、理論的な背景について具体的な例を交えて説明した。



【グループワークとは何か】

(1) グループワークという言葉には2種類の使われ方がある。

- ① グループによって行われる(グループによる)ワーク＝共同作業
- ② ワーカー・リーダーによる(グループへの)ワーク＝教育や福祉分野での支援の方法

i ワーカー・リーダーの存在が前提になります。

ii ワーカー・リーダーが意識的にグループの一員として、より良い相互作用が生じるようにグループへ働きかけ、結果としてメンバーの成長を支援する方法であり、単なる共同作業や団体活動とは異なります。

## (2) グループワークの特徴

・グループという場で起こる濃厚な人間関係の相互作用を通して、個人の成長とグループの変容をはかる、教育的過程、方法です。

・グループワークは、地域社会における、社会福祉、社会教育など、社会的・公共的な目的を持った団体、施設において、それらの目的実現、事業遂行のための手段・方法として用いられます。

## (3) グループワークの教育的意義

### <社会性の成長>

他のメンバーと一緒にさまざまな活動を通して、多くの他者と出会い、他者との関わり方のルールを学び、葛藤を通じた協調性や自律性の伸長を図り、コミュニケーションの幅が広がることにあります。

### <個性の成長>

個性とは他者がいて初めて存在するものであり、いろいろな人と出会い、他の人と自分の違いに気づく中で「自分らしさ」は徐々に形成されていきます。

・このように社会性も個性もグループがあって初めて発揮されるものであり、成長するものです。そのため、グループリーダーは個性と社会性のバランスを保ちつつ、いかに双方が尊重され、発揮されるような状況を作り出せるかが大切になります。

## (5) 「自然体験活動の意義再考～体験活動を哲学から考える～」

講師：立教大学大学院

教授 内山 節氏



・ 体験活動の意義を哲学的に考えて見た場合、社会が近代化していく反面で自然、人、地域の歴史・文化とのつながりが減少していき、現在では、そのつながりを回復していく機会として、自然体験活動が重要な働きをしている。

## 5. 評価

### (1) 評価の方法（アンケート調査の実施）

- ・ 研修にふさわしい開催時期や参加にあたって支障になったことなど、事業を企画するための参加者のニーズを聞きました。
- ・ 参加者に対し講義の内容について、4段階での評価とともに記述による自由な感想を求めるアンケート調査を実施しました。

### (2) 結果

- ・ 参加者 25 名のうち、24 名が事業全体にとっても満足したと回答しています。
- ・ それぞれのプログラムについての満足度は全てのプログラムで 90%以上の参加者が満足したと回答しています。

内 容	満足度
事業全体（運営面含）	96 %
講義① 「青少年教育における不易と流行」	92 %
講義② 「我が国の青少年教育施策」	92 %
事例研究・演習③「ケーススタディで学ぶ企画力・運営力」	100 %
講義・実習④ 「グループワークの理論と実践」	92 %
講義⑤ 「自然体験活動の意義再考～哲学から考える～」	92 %

（自由記述による感想）

- ① 青少年教育の歴史的な変遷を初めて聴くことができ、自身の今後の社会教育活動の基盤ができたように思いました。
- ② 青少年教育について、今何が求められているか、指導者としてどのように実践していくべきかを話していただき心に残りました。
- ③ 地域づくりとしての青少年教育の立場に立った事例発表は今後、企画を進めるにあたって重要なポイントになると実感しました。
- ④ 民間団体と公立施設がそれぞれの特性を活かした共生をしていくことができれば良いと考えました。
- ⑤ 無意識に行なっていたようなことをあらためて学ぶことができ、さらに新しい気づきも多く、実践で役立てていきたいです。
- ⑥ 哲学、社会学として人・自然とのつながりを自然体験活動から考えるという観点を学び、今後の活動の中で実践したいと考えました。等  
多くの参加者から、今後の活動で実践していく大きな自信を持たたという感想が聞けました。

### Ⅲ 事業の企画と運営

#### 1. 企画のポイント

- ① 事業を実施するにあたり、青少年教育施設職員を対象に研修内容に関するニーズアンケート調査を行ない、その結果から研修の内容を設定しました。
- ② 知識として理解したことを実践できることが重要であると考え、講義と実習を組み合わせるとともに、研修の時間を十分に確保しました。
- ③ 「企画力」「運営力」を高めるための研修の手法として、事例研究（ケーススタディ）を用いて、成功事例の協議を通じて、その成功要因を追究することにより企画・運営のノウハウを習得することとしました。
- ④ 企画と運営は一体的なものとして捉え、事業プログラムだけの企画ではなく、企画から運営までの全プロセスを企画することを想定しました。
- ⑤ 青少年の指導方法として、精神的な内面を育てる手法としてのグループワークに焦点化し、理論的な背景を理解した上で、今後の活動で実践できる力を身につける内容としました。
- ⑥ 自然体験活動の必要性を、統計データや野外教育の視点からではなく、哲学的という新たな視点からの講義を聴くこととしました。
- ⑦ 指導者として長く経験を積んだ者にとって、自身の中にできている「青少年教育の枠組み」について再考する機会としました。

## 2. 運営のポイント

- ① 参加者が主体的に研修に参加できるように事前アンケートを行ない、講義に期待することや自身が課題としていることを確認しました。そして、集約したものを参加者に配布し問題意識の共有を図りました。
- ② 講師に参加者のアンケート結果を事前に伝え、講義の中に参加者が求めていることを取り入れていただくこととしました。
- ③ 参加型の研修スタイルをとることから、参加者相互の理解を深め、忌憚なく意見交換ができるように個人のプロフィールを事前に提出してもらい、事業開始時に参加者に配付しました。
- ④ 参加者に多様な視点や多角的な考え方を持ってもらうために、講義を受けた感想等のアンケート結果を集約し、事業後に参加者に配布しました。

## 3. 成果

- ① 青少年教育に携わる者として、技術面のスキルアップだけではなく、様々な専門的分野の理論をあらためて学び理解することで、指導者としての資質・能力の向上につながる研修となりました。
- ② 長く経験を積んだ指導者にとっても、初めて体験する研修方法や哲学の分野等による新たな切り口からの講義によって、自身の中に出来上がっていた「枠組み」を再考する機会となりました。
- ③ 全国各地、15 道県から参加者が集ることができたため、それぞれの施設・各地域における取り組みを紹介し、意見交換し合い、参考になる点や改善できる点等を互いに確認することができ、プログラムの内容以外の部分でも充実した研修となりました。

## 4. 今後の課題

- ・ 本年度実施した専門研修の内容を参加者からのアンケート結果を基に吟味し、よりニーズに見合った内容にするため、青少年教育指導者にとっての必要な知識・技能とはどのようなものか研修の内容を検討して、企画をしていきます。

## 5. 参考資料

### (1) 資料

- ① 募集ちらし
- ② アンケート用紙
- ③ 実施案

担当：望月省吾，佐粧和也，内海隆博